

宮城県の教育格差の現状と対策

宮城県仙台第三高等学校 教育ー7班

1. 背景と目的

〈背景〉
世界で教育格差が深刻化
→宮城県内でも教育格差が生じている

・全国学力調査(※令和5年度、小6と中3が対象)

全国との差

仙台市:小6の算数を除き1〜4ポイント上回る
仙台市以外:全ての教科で下回る

考えられる要因

- ①経済力
- ②学校の収容人数、生徒数
- ③家庭の教育に対する関心

〈目的〉

- ・身近にある教育格差を多くの人に理解してもらう
- ・高校生の視点から格差解消に向けた活動を提案する

2. 方法

1 先生方にアンケートをとり、教育格差の原因を調査する

質問① 仙台市内外で教育格差が生じている原因(1参照)
質問② ①に対する理由、またはこのような体験をした、etc..

2 修学旅行で関西大学を訪問する

- ・教育格差の要因として考えられること
- ・学習支援の効果と実際に行われている格差解消のための活動

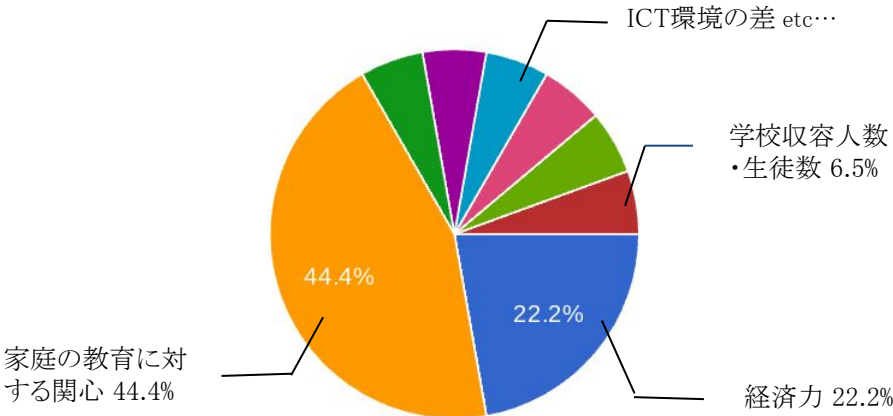
3 教育格差解消に向かう活動を提案して実践する

- ・学習支援が有効だと予想

3. 結果・考察

教育格差の原因

○ アンケート調査



⇒「家庭に対する教育関心」が原因？

教育格差解消に有効な活動とは

○ 修学旅行でのインタビューを通して

- ①学習支援は有効ではない。
- ②「体験格差」が広がっている。幼少期の様々な体験が意欲関心を養う。
- ③非認知能力(やる気など測定不可能な能力)が重視されている。

→学習支援をメインにするのではなく、根底にあるやる気、粘り強さ、好奇心など非認知能力を育むことができる機会を作る

教育格差解消へ向かう活動の提案

○ 鶴ヶ谷児童館への訪問

目的:非認知能力を育むための活動を実施し、その妥当性を調査する

着目した観点

- ①主体性→子どもの興味を刺激
- ②問題解決能力→ゲーム内容の工夫
- ③探究心→ゲーム内容の工夫
- ④協働能力→他学年との関わり
- ⑤自己肯定感→達成感、やりがいを感じられる
- ⑥コミュニケーション能力→グループ活動、高校生との関わり

⇒オリジナル版水平思考ゲーム

- ・グループワークを取り入れた(異なる学年)
- ・多くの児童と会話する

振り返り

- △評価者が我々だけであった
- △継続的な測定ができておらず、非認知能力向上に対する効果が曖昧。
- 子どもたちが非認知能力を駆使する姿が見られた。
- 地域の子どもたちを地域の資源(高校生)によって育てることができる→様々な地域で行える可能性を示すことができた
- 遊びの場でも、学習に活きる機会をつくることができる

		4 (S)	3 (A)	2 (B)
		1日に何度も見られる	1日に数回見られる	ほとんど見られない
主体性	他者からの働きかけを待たずに自ら行動する		○	
	問題の解決や達成に向けて、何らかのアクションを起こしている	○		
問題解決能力	課題解決のために臨機応変かつ適切に対処する	○		
	身近なことに疑問をもつ		○	
コミュニケーション能力	他者の感情を理解、尊重する	○		
	自分の意見を適切なタイミングや方法で表現する	○		
探究心	物事を掘り下げ、見極めようとする意欲が旺盛である	○		
	困難なことにも、根気強く取り組む			○
自己肯定感	幅広い視野で物事を考える	○		
	物事に対して態度が前向きである	○		
	成功体験がある	○		
協働能力	互いに肯定し合う	○		
	努力を継続する			○
	感情をコントロールする		○	
傾働能力	異なる学年、立場にある人と助け合う	○		
	異なる学年、立場にある人を尊重する	○		
	異なる学年、立場にある人と共に、目標や目的を達成する	○		

4. まとめ・結論

教育格差の主な要因は、「家庭の教育に対する関心」ではないか。
格差解消に有効な活動の1つとして、子どもの体験格差を埋めること、つまり、非認知能力を平等に高める機会を作ることが挙げられる。
地域内の連携や身近にある遊びの場を活用することで、その活動を促進できるのではないかと考える。

5. 参考文献

https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/219145/1/sse_017_001.pdf
https://www.77rc.co.jp/article_source/data/newsrelease/files/newsrelease_20221025_2.pdf
<https://www.asahi.com/articles/ASR70747RR70UNHB001.html>

6. 謝辞

関西大学